2018年第５回広野町国際フォーラム

「地域共生のまちづくり ～復興従事者との共生～」を終えて

熊本学園大学社会福祉学部　准教授　**髙木　亨**（たかぎ　あきら・博士（地理学））

広野町のみなさま、新年あけましておめでとうございます。早いもので、広野町国際フォーラムでセッションを開催してから、はや３ヶ月が経過しようとしています。本フォーラムとは、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターに在籍していた第１回（2014年）から関わり合いがあります。第２回からはセッションコンビーナーとして毎回セッションを担当しております。

さて、今回のテーマである復興従事者（いわゆる「作業員」）と住民のみなさまとの関係性については、2015（平成27）年の第２回国際フォーラムにて「広野町の安全安心を考える～いろいろな不安を言うべー会」で取り組みました。当時の状況は、廃炉作業や住宅除染作業が活発化する中、住民帰還がなかなか進まず、広野町のあちらこちらに復興従事者向けの宿舎が乱立するような時期でした。住民の皆さまにとっては、「聞き慣れない方言」「いかつい男の人たち」「様々なうわさ話」など不安を感じさせる状況がありました。町外避難をされている方々にとって、帰還しない（できない）理由の一つとして「作業員」の存在があがったことも、まだ記憶に新しいかと思います。

そのような状況の中、セッションでは双葉警察署広野駐在所のお巡りさん、作業員向けホテルの経営者さん、除染を担当しているゼネコンの広報担当者さん、役場職員さんをパネラーとして語り合いました。結論としては、まず広野町の住民コミュニティが避難により崩れていて、再生途上にあるという背景があること。そこに、見ず知らずの復興従事者が多数住んでいることへの違和感が住民にあること。とはいえ、住民も多様な復興従事者の存在をよく理解していないこと。多様な復興従事者とは廃炉関係、土木作業関係、港湾作業関係、除染作業関係などであり、「作業員」とひとくくりにしないこと。また、多様な作業に携わっている人々がいる中で、「無理に」仲良くする必要は無く、その存在を住民の側が認めるだけでも良いのではないか。お互いがお互いの存在を認めあうという緩やかな関係で「共存」していきましょう、というようなものでした。

それから３年が経過し、除染作業も一段落する中、再び「復興従事者との共生」をテーマにセッションを担当してほしいとのオファーを復興庁・広野町役場からうけました。私自身、福島から離れて２年半が経過して、復興従事者に関する情報から離れていたこともあり、なぜこのテーマをまたやらねばならないのか、除染作業もほぼ終了し、住民の帰還も進み課題はほぼ解消されているのではないか、そんな疑問が生まれました。

セッションの準備を進める中、私が福島を離れた後の変化を知りました。住民の帰還が進み、震災前の８割程度まで人口が回復していること。減ってきたとはいえ、2,300人にもおよぶ復興従事者が町内で生活していること。そして、復興従事者についての研究も進んでいないこともわかりました。そこで、今回のセッションでは、広野町および被災地域のより良い復興（Build Back Better）に向けた復興従事者との緩やかな共生に向けたきっかけを見つけることをテーマとすることにしました。

今回のセッションは、復興庁の広野町担当である三輪賢志さんに人選をお願いし、個性豊かで幅広いパネリストとなりました。その面々は、広野町で居酒屋を経営しさまざまな地域活動をしている鈴木すみさん、そのお店のお客さんで第一原発の廃炉作業に携わっている鈴健工業の小池匠一郎さん、ふたば未来学園の社会企業部で活躍されている島翔太さん（２年生）と大和田美月さん（１年生）、そして行政の立場からこれまでの経緯をよくご存じの環境防災課長の猪狩裕一さん（順不同）の５名でした。それぞれの立場から、共生をテーマに話をしてもらうことにしました。

なかでも、画期的だったのは、実際に廃炉作業に携わっている小池さんの存在でした。前回は、廃炉や除染にかかわる関係者（ゼネコンの広報や作業員向けホテル経営者）の方がパネリストでしたが、当事者である実際に作業にかかわっている方に登壇してもらうことはできませんでした。実際の作業内容とともに、避難者の気持ちに寄り添うような想いで廃炉作業に携わっていることを率直に話してもらいました。

鈴木さんは、お店でのエピソードを交えながら、復興従事者のみなさんの姿をわかりやすく語っていただきました。その一方で、復興従事者の数が減ってくる状況に経済的な危機感を持っていることなど、将来への不安も出てきました。

高校生の島さんからは、地域活性化を目指して活動している社会起業部の紹介、大和田さんからは同じく社会起業部の活動であるカフェチームについて紹介してくれました。とくに、大和田さんが活動しているカフェ活動は、さまざまな地域にかかわる人たちの交流の場づくりを目指していて、そこには復興従事者の存在も視野に入れているとのことでした。

猪狩さんには、行政の立場から復興従事者の現状や対応についての話をしてもらいました。その中から、前回（３年前）とは状況が変わってきていることが見えてきました。

このようなパネリストのみなさんからの報告を受け、見えてきたことは、変化しつづける広野町（被災地域）において日々生活している人々同士が、少しずつ理解を深めようとしている姿でした。復興従事者の方々が集える飲食店という「場」。多様な住民（高齢者から高校生まで）と復興従事者も含めた人々が集える「場」となるであろうふたば未来学園のカフェという「場」。役場や住民が集うきっかけとなるサマーフェスなどのイベント開催という「機会」と「場」づくり。広野町にかかわるみなさんが、多様な人々とふれあえる「場」と「機会」を少しずつ作り出すことで、互いの距離を「少し」縮めているのではないでしょうか。そして、復興のために仕事で広野町に滞在する復興従事者の方々に広野町を少しでも好きになってもらえる、広野町のファンになってもらえれば良いことなのだと思いました。

そこに加え、小池さんの発言にあった「挨拶」「声かけ」が、とても重要な役割を果たしていることが見えてきました。小池さんは、復興従事者に対して住民が構えてしまわないよう、積極的に挨拶をして、顔が見える関係づくりを心がけているとのことでした。また、島さんも自身の列車通学時の体験談から、挨拶が復興従事者の方との距離を少し近づけてくれたとの話をしてくれました。「あたりまえ」のことなのですが、あらためて「挨拶」の持つ力を感じました。

もともと、広野町の住民の皆さんには、電力関係者を中心とする多様な人々を受け入れる力がありました。残念ながら、震災により住民コミュニティが破壊されてしまいました。しかし、発災からもうすぐ８年となる中で、新たな住民コミュニティが形成されてきています。再び、外部の多様な人々を受け入れる力が付いてきたのではないでしょうか。広野町を好きになってもらい、心地よい隣人関係をつくっていくためにも、まずは挨拶からはじめてみるのもいいかもしれません。

最後に、さらなる広野町の進化に期待するとともに、微力ながらお役に立てればと思います。ありがとうございました。